

決然と立ち向かい、抗う気概と覚悟を持たなかった朝日と元記者

植村元記者のジャーナリストとしての資質がもっとも疑われるのは、《ある元朝鮮人慰安婦の証言を録音したテープ》を基に、元慰安婦の証言記事を書いている点である。手記にはこう記されている。

1991年8月10日、《大阪社会部員だった私は、このテープを聞くためだけに韓国へ出張したのだった。出張前、大阪から尹貞玉さんに取材を申し込んだが、証言者はマスコミの取材を受けることを拒否しており、名前も教えられない、と言われた。しかし、テープを聞かせることはできるという。インタビューではない、質問もできない。それでも私は重要なニュースだと思った。確かな情報源のためテープでも問題ないと判断した。》

『文藝春秋』編集部は当然ながら、《この記事は、十分な検証なしに相手の言い分をそのまま載せたものであった。》と疑問を呈しているが、《インタビューではない、質問もできない。それでも私は重要なニュースだ》と、どうして思うことができるのだろうか。その判断の根拠は述べられていない。同様に《確かな情報源》かどうかを確認できないのに、どうして《テープでも問題ないと判断》できるのだろうか。ここには、自分がそう思って判断したから間違いがないという思い込みが綴られているだけで、誰もがいただく疑問に答えていきながら、テープの信憑性を確信するにいったというようなことを感じさせるものはなにひとつない、“すべてを疑う、精神とは対極の、”すべてを信じる、能天気な弛緩した精神しかみられない。これでは自分すら説得させることはできないであろうのに、このような真偽のほどもわからない記事を紙面に載せることを許可した朝日の上司も、どうかしているとしかしいようがなかった。

《確かな情報源》など何一つないのに、そう思い込むのは、このテープを彼に聞かせた人間が挺対協の尹貞玉共同代表であったからであろう。要するに、挺対協の尹貞玉共同代表は彼にとって十分信用に値する者であったから、テープも信用できるし、《インタビューではない、質問もできな》くても、《重要なニュース》でないはずがなかった。いいかえれば、尹貞玉共同代表が《重要なニュース》でないテープをわざわざ自分に聞かせたりはしないということであった。《重要なニュースだと思った》とき、そのような《重要なニュース》を自分にだけ特別に伝えてくれる尹貞玉共同代表は、《確かな情報源》そのものであると思わざるをえなかったのである。

もちろん、挺対協がどのような偏向した支援団体であるかは、その後、日本人の誰の目にも明らかとなった。当時は判然とはしていなかったとはいえ、元記者はそのような挺対協と組んで怪しげなテープを基に記事を書いたこと責任は免れないのである。その後、挺対協の歪んだ姿が顕わになった時点で、彼は自分の記事執筆～掲載および、当時の自分の慰安婦問題へのかかわりかたについて徹底的に自己検証することが課せられていたにちがいがなかった。もっともそうであるためには、彼の目に挺対協の偏向した姿がそのまま映しだされていなければならなかったが、手記からはそのような内省はまったく伝わってこない。

朝日の検証記事には、《批判する側の主な論点は、①元慰安婦の裁判支援をした団体の幹部である義母から便宜を図ってもらった②元慰安婦がキーセン(妓生)学校に通っていたことを隠し、人身売買であるのに強制連行されたように書いたという点》にあり、《植村氏によると、8月の記事が掲載される約半年前、「太平洋戦争犠牲者遺族会」(遺族会)の幹部梁順任(ヤンスニム)氏の娘と結婚した。元慰安婦を支援するために女性研究者らが中心となつてつくったのが挺対協。一方、遺族会は戦時中に徴兵、徴用などをされた被害者や遺族らで作る団体で挺対協とは異なる別の組織》であり、《取材の経緯について、植村氏は「挺対協から元慰安婦の証言のことを聞いた、当時のソウル支局長からの連絡で韓国に向かった。義母からの情報提供はなかった」と話す。元慰安婦はその後、裁判の原告となるため梁氏が幹部を務める遺族会のメンバーとなったが、植村氏は「戦後補償問題の取材を続けており、元慰安婦の取材もその一つ。義母らを利する目的で報道をしたことはない」と説明する》と記されている。

手記にも、挺対協と義母(梁順任)が常任理事を務める遺族会とは別組織で、《政治的な傾向は違っている》と主張されているが、論点は挺対協と遺族会とは別組織であることにあるのではなく、どのような関係にあるのか、という点にあるはずである。元記者はその点について説明しなくてはなら

ないのに、別組織で済ませようとしているのだ。記事掲載の4日後に名乗り出て記者会見した、先のテープの語り手であった元慰安婦（キムハクスン）が、朝日の検証記事に《元慰安婦はその後、裁判の原告となるため梁氏が幹部を務める遺族会のメンバーとなった》とあるように、挺対協と別組織とされる遺族会のメンバーとなったということは、元慰安婦の支援団体である挺対協と遺族会とは、日本に対する戦後補償問題で密接に連携していたと受けとめるのが当然であろう。

元記者は「義母からの情報提供はなかった」し、「義母らを利する目的で報道をしたことはない」と説明するが、彼が慰安婦問題について真実を明らかにする側に立ってではなく、元慰安婦側に寄り添って取材し、記事を書くとき、いうまでもなく挺対協と遺族会にも寄り添っていくことになるのは避けられなかったであろう。そうすると、「義母からの情報提供」がなくとも、義母が幹部を務める遺族会からの情報はあったであろうし、意図せずに遺族会の幹部を務める「義母らを利する目的で報道」することにもなってしまうであろう。

「李下に冠を整さず」という中国の諺がある。人に疑われるようなまぎらわしい行為はするな、という戒めである。元記者の結婚相手が挺対協の幹部の娘であろうと、遺族会の幹部の娘であろうと、そんなことは些かも問題ではない。問題はそのような娘と結婚しながら、慰安婦問題にかかわっていくなら、どのような立場をとっているかが、少なくとも日本では疑いのまなざしを厳しく向けられることになるのは必至であるのに、元記者はおそらくそのことをほとんど考慮することなく、自分の思い込みで慰安婦問題についての正しいあり方を追及していったようにみえることである。そして案の定、やり玉にあげられることになった。私生活は別ではないか、という理屈は通らない。元記者もジャーナリストの端くれであったなら、私生活という建前など吹っ飛んでしまう取材を何度も体験してきているはずだ。だいいち、慰安婦問題そのものが私生活を奪われている事態であった。

元記者が遺族会の幹部の娘と結婚しながら慰安婦問題にかかわっていくなら、彼は予想される批判に決然と立ち向かうためにも、元慰安婦側に寄り添って支援するようにみえるこれまでの立場を是正して、元慰安婦側の主張に耳を傾ける以上に、慰安婦問題の真実により多く耳を傾ける公正な立場を築くことを心がけながら、慎重に取り組む必要があった。なぜなら、殺到する批判のなかにも、元慰安婦側の主張により多く耳を傾ける元記者の立場には公正ではない大きな偏差が見出されるのではないか、という正当な指摘が含まれていたであろうからだ。元慰安婦を味方につけるよりも、真実を味方につけるなら、必ずそのような主張は対立し合っている双方の閉ざされた頑なな心をこじ開けて、血流が通る道を切り拓いていくにちがいがなかった。

正しいものは正しいのだから、その道を真っ直ぐに突き進んでいけば、やがて理解されて受け入れられる、という賢明でもないし、共感もいなくことのできない元記者の姿勢は、朝日の検証記事のものにも貫かれていた。ジャーナリストの青木 理は「朝日バッシングの背景と本質」（『世界』14.11）で、〈稚拙でひ弱だった朝日の対応〉についてこう記している。

《誤報を誤報として認めるのは当然にせよ、現在の政界や日本社会の雰囲気を見れば、記事取消しを含む検証記事が激しい非難と反発を引き起こすのは事前に十分予想できた。「慰安婦問題の本質直視を」などというやわな良識を押し立てるだけで現在の状況に抗えるはずもない。それはまるで、あちこちで燃え上がる火の手に向けて、水をかけるつもりでガソリンをぶちまけるような行為に近かったのではないか。

ならば本来、朝日は「反撃の矢」を用意してから検証記事掲載に踏み切るべきだった。精鋭の取材班を組み、徹底的な取材で新事実などもつかみ出し、まさに「慰安婦問題の本質」を浮かび上がらせる記事を時を置かずに連打し、攻撃と対峙するくらいの準備と覚悟を持つべきだった。》

「吉田調書」問題にも《朝日のやわな良識によって生じた罪が見て取れる》が、《吉田調書にあった「我々のイメージは東日本壊滅。本当に死ぬかと思った」といった原発事故をめぐる本質が置き去りにされ、調書が朝日攻撃のネタに矮小化されてしまった》こと——そのきっかけをつくりだしたことがなにより朝日の最大の罪——を指摘する一方で、官邸をも交えた権力闘争ともいえる一連の事態に《立ち向かい、抗う気概と覚悟を朝日側が持っていたかが問われるのだが、残念ながらそうした気配はほとんど感じ取れず、《稚拙でひよわな対応を繰り返すことで無惨に膝を屈してしまった》とみる青木は、《この国のメディアとジャーナリズムはすでに「総転向状態」というべき位相に入り込んでしまった》と考えるなら、《現状に抗い続ける》ためにも、《私自身、己の手をしげしげ眺めつつ、本気の覚悟が問われる時代だと痛感している。》と書く。